



施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602
5月の休館日: 6月、10月、17月、24月、31月

★★★ 注目のイベント ★★★

5月21日(金) 19:00~

岡安芳明カルテット ミーツ 小林桂

◎彦根オリジナルナンバーを含めたレコーディングライブの様相を収録したCD発売記念コンサート! ギタリスト岡安芳明を筆頭に、文化プラザオリジナルカルテットメンバーに、実力派ヴォーカリスト小林桂をスペシャルゲストに迎えお送りします。



指定 3,800円

6月12日(土) 18:30~ 劇団四季ミュージカル

ソング&ダンス55ステップス

◎喝采、拍手、熱狂...ミュージカルの名曲とダンスが一体となり、劇場全体に解き放たれる圧倒的なパワー。驚異のステージに出会う絶好のチャンスをお見逃しなく!

指定 SS席8,000円、SA席7,000円、A席4,000円、B席2,000円



撮影: 荒井健



撮影: 下坂敦俊

5月3日(月祝) 15:00~

指定 宮川彬良&アンサンブル・ベガ

5月5日(水祝) 14:00~

エコーホールピアノメンバー第1回成果発表会

A Piacere! (ア ピアチェーレ)

◎ゲスト ピアニスト南千寿子

自由 一般500円、中学生以下無料

5月12日(水)・19日(水)・26日(水) 19:00~

自由 ひこね市民大学講座2010「歴史手習塾」

◀セミナー2▶「戦国彦根の城郭講座」
6月6日(日)山崎山城フィールドワーク開催!

8月3日(火) 18:30~

キエフ・バレエ~ウクライナ国立バレエ~ 華麗なるクラシックバレエ・ハイライト

指定 5,500円(4歳以上有料)

8月14日(土) 14:00~

ミュージカル「火垂るの墓」

自由 中学生以下500円、一般1,500円、シニア(60歳以上)1,000円【5月29日(土)発売開始】

9月4日(土) 18:00~

宮川彬良&大阪市音楽Dahhhhh!

指定 4,000円(3歳以上有料)【5月8日(土)発売開始】

9月11日(土) 15:00~

宝くじコンサート~シューマン生誕200年~ 大阪交響楽団演奏会

指定 一般3,000円、高校生以下1,500円【5月23日(日)発売開始】

そのほかの催しも好評発売中

チケットのお申し込み、お問い合わせは
チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)
インターネットでも購入いただけます。http://bunpla.jp/

彦根城博物館

☎22-6100 FAX 22-6520
5月の休館はありません。
※5月18日(火)~同20日(木)は展示替えのため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30~17:00 (入館は16:30まで)

5月21日(金)~6月15日(火)

「鬼神と霊一能にみる異界」

井伊家伝来の能面のうち、鬼神と霊の能面を中心に紹介。人間を超越した存在がいざなう能の異界にせまります。



能面 獅子口

テーマ展

ギャラリートーク

「鬼神と霊一能にみる異界」

5月22日(土) 14:00~15:00

解説: 本館学芸員 降矢 淳子
※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

観覧料が必要です

ほんものとの出会い

一常設展示の名品一

常設展示「ほんもの」との出会いでは、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に80点あまりを展示しています。

5月18日(火)まで

古瀬戸肩衝茶入 銘夏山

抹茶の粉を入れる茶入。有名な茶人・小堀遠州によって分類され、「夏山」と銘が付けられました。



常設展示の名品

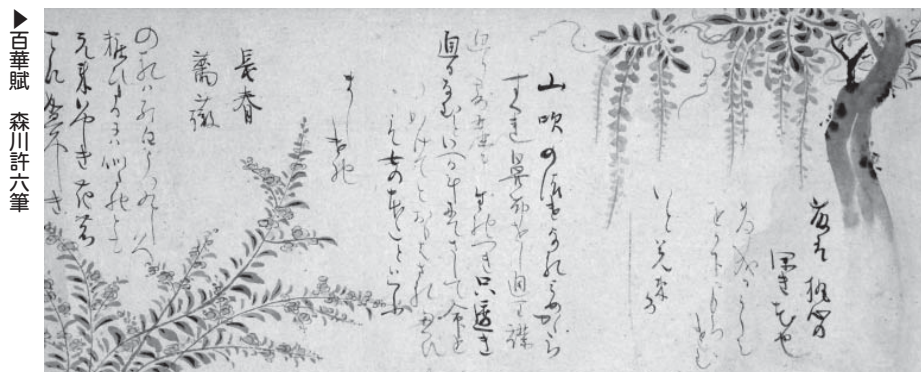
森川許六筆「百華賦」一俳文と画との一致

ときの玉手箱

博物館からのメッセージ



第165回



百華賦 森川許六筆

「百華賦」は、梅、桜に始まる30余種の花々をおもに女性に例えた俳文(俳諧独特の面白みのある散文)に、それぞれの花の画を添えた巻物です。作者は彦根藩士森川許六(1656~1715)。俳人松尾芭蕉(1644~1694)の代表的な弟子の一人です。「百華賦」の一部をひもといてみましょう。例えば、初夏を彩る藤の花。執念深く、どんな恨みを持っているかよく分からず、薄気味が悪いと評されています。一方、山吹は、清楚で容貌が優れ、透き通るほど綺麗だというばかりで、男から命をかける気持ちには至らない、とのこと。

実はこの部分の記述は、鎌倉時代の吉田兼好の随筆集「徒然草」をもとに着想されたものです。同書には、初夏は、清楚な山吹や藤籠とした姿の藤などが見られるので、捨てがたい季節だとあります。これに対し許六は、山吹が清楚なことは認めるが、命をかけられるような魅力ではないとし、ぼんやりとしているように見える藤は、感じがいよいではなく、薄

気味が悪いのだと言ってけなしているという構図です。著名な兼好の目に適った花を斜に構えて評しているわけなので、少々嫌みにも感じられます。しかし、ここが俳文の真骨頂。俳文では、意外性や皮肉など、機知的な発想が求められるからです。許六の機知は、芭蕉からも高く評価されていました。「百華賦」の見るべき魅力は、文章だけではなく、画にもあります。許六は、俳諧を詠み、俳文を書く「俳人」として活躍する一方、画を得意ともしました。芭蕉は、俳諧は自分が許六の師だが、画は逆に、許六が自分の師だと述べています。許六の作画技術自体は、専門絵師の技量には及びません。しかし、俳画というジャンルでは、彼の魅力が前面に表れ、俄然精彩を放ちます。俳画とは、画によって俳諧の世界をあらわした作品でもいうべきもので、たいていは墨のみ、または淡い色彩の絵の具を用い、省筆で余白を活かして描かれます。型にはまっ

写真の「百華賦 森川許六筆」は、常設展示「ほんものとの出会い」で、5月19日(水)~6月14日(月)に展示します。(期間中無休)

(彦根城博物館学芸員 高木文恵)